

親鸞の欠筆

— 親鸞が影響を受けた文献群 —

佐々木 勇

○、本稿の目的

親鸞は、中国北宋の皇帝諱字を欠筆とする。

日本古文献において中国皇帝の諱字を欠くことは希であり、南宋中期に相当する時を生きた親鸞が北宋前期皇帝の諱を避けたことも不思議であるため、親鸞の欠筆は早くから注目されてきた^①。

一方、親鸞は、中国宋版一切経の北宋開寶藏^②および南宋思溪藏^③一切経本文を引用したことが指摘されている。では、親鸞の欠筆は、北宋開寶藏あるいは南宋思溪藏版本の欠筆に依るのであるのか。

本稿は、親鸞が行なった欠筆の抛り所を特定することを目的とする。

一、親鸞の欠筆

親鸞が欠筆としたのは、「玄・絃・畜・牽・敬・竟・境・競・鏡・弘・貞」の諸字である^④。これらは、北宋の始祖とされる玄

朗から第四代趙禎までの皇帝諱および嫌名に当たる。

ここで、親鸞入滅時までの宋代皇帝とその諱・嫌名の概要を記すと、左の如くである。⁵⁾

北宋（九六〇年―一二二七年）

諱・嫌名

聖祖（始祖）・趙 玄朗

玄絃 弦炫 炫眩 畜縣 懸朗

太祖の祖父・趙 敬

敬驚 警傲 竟境 鏡鏡

太祖の父・趙 弘殷

弘殷 殷

初代太祖・趙 匡胤（在位 九六〇―九七六年）

匡胤

二代太宗・趙 匡義（在位 九七六―九九七年）

吳愷 愷義 議

三代真宗・趙 恒（在位 九九七―一二二二年）

恒

四代仁宗・趙 禎（在位 一二二―一〇六三年）

禎貞 禎偵 徵懲

五代英宗・趙 曙（在位 一〇六三―一〇六七年）

曙署 樹豎

六代神宗・趙 頊（在位 一〇六七―一〇八五年）

頊勗 旭

七代哲宗・趙 煦（在位 一〇八五―一一〇〇年）

煦休

八代徽宗・趙 佖（在位 一一〇〇―一一二五年）

佖吉 姑

九代欽宗・趙 桓（在位 一二二五―一二二七年）

桓垣 垣垣 完丸 源

南宋（一二二七年―一二七九年）

初代高宗・趙 構（在位 一二七―一二六二年）

構溝 溝 觀 勾 勾

二代孝宗・趙 慎（在位 一二六二―一二八九年）

昏慎 蜃

三代光宗・趙 惇（在位 一二八九―一二九四年）

惇敦 墩 燉

四代寧宗・趙擴 (在位一一九四―一二二四年)

擴郭廓

五代理宗・趙昀 (在位一二二四―一二六四年)

昀筠馴巡

すなわち、南宋二代から五代皇帝の間、一一七三年から一二六二年を生きた親鸞が欠筆としたのは、北宋の始祖から第四代までの皇帝諱であった。⁶⁾

二、仏典の欠筆

1. 開寶蔵の欠筆

親鸞が閲覧した宋版一切経開寶蔵には、「敬竟殷慳」に欠筆のあることが指摘されていた。⁷⁾

近年、開寶蔵残卷全十二巻が複製公刊されたことにより、右に加えて、「弘」の欠筆を確認できた。⁸⁾ 開寶蔵は、九七二年―九七七年の雕版であり、北宋初代太祖の祖父および父の嫌名のみを欠筆とする。この開寶蔵の欠筆は、親鸞への影響は否定できないものの、親鸞の欠筆を覆うことができない。

したがって、開寶蔵の欠筆を残すことがある、高麗初雕版・再雕版および金版の欠筆も、親鸞の欠筆とは異なる。なお、開寶蔵版・高麗版・金版一切経の欠筆と、親鸞の欠筆との相違として、親鸞は「玄」を欠筆とする点も重要である。現存開寶蔵は「玄」を欠筆とせず、開寶蔵の欠筆を比較的良好に反映する高麗初雕版にも「玄」の欠筆を見出せない。

開寶蔵が「玄」を欠かないのは、趙氏始祖とされる「玄朗」は、北宋三代皇帝真宗が大中祥符五年(一一一三)に作り出した、道教の神仙であるためである。⁹⁾

2. 思溪藏の欠筆

先に記した如く、親鸞は、開寶藏の外に思溪版一切経を閲読していた。その思溪版の欠筆に関する比較的早い報告は、思溪藏五四八〇巻の「ほぼその一割」を調査し、「欠画はきわめて稀に「敬」字にみられるほかは、ほとんどされていない。」とするものである⁽¹²⁾。

その後、尾崎正治は、大谷大学図書館藏思溪版『大方広仏華嚴経』（六十華嚴）における欠筆を精査し、「敬・驚・弘」に欠筆が存すること、「敬」の欠筆率が高いこと、欠筆率は刻工による個人差・グループ差が見られることを明らかにした。また、版心記・巻首巻末千字文には、『大方広仏華嚴経』に限らず、「敬驚殷貞」の欠筆例が存することを指摘した⁽¹³⁾。

長谷寺藏思溪版二二七一帖中でも、「特に意識はしなかったが」として、やはり『大方広仏華嚴経』巻第五十六断簡の「敬」欠筆一例が報告されているに過ぎない⁽¹⁴⁾。

そこで、本稿の筆者も、親鸞引用仏典を中心に、思溪版における欠筆字を調べてみた⁽¹⁵⁾。

まず、坂東本『教行信証』に引用されている、思溪版『大方等大集経』日藏分・月藏分二十帖の全体では、欠筆字は「敬」字二例（日藏分巻九第十紙4行目、月藏分巻七第六紙16行目）であった。

次に、坂東本『教行信証』に『大方等大集経』とともに多用される、『大般涅槃経』北本（四十巻本）・南本（三十六巻本）および『弁正論』（全八巻）・『大唐西域記』（全八巻）を見た。

しかし、『大般涅槃経』北本全四十巻に、欠筆字は一字も無かった。

『大般涅槃経』南本全三十六巻では、「敬」（巻第十四第十七紙17行目・同第十八紙8・15行目、巻第三十六第十四紙12行目）、「弘」（巻第十七第十五紙18行目、巻第三十六第十四紙5行目）を見出せた。

『弁正論』八巻中には「敬」（巻第四第二十七紙7行目）、「大唐西域記」（全八巻）にも「弘」（巻第五第四紙29行目）

の欠筆例が存するのみであった。

その他、無量寿経・大阿弥陀経・観無量寿経・小阿弥陀経・妙法蓮華経・称讚浄土佛撰受経・太子沐魄経・九色鹿経・菩薩睺子経・無量寿優波提舍経・大乘起信論・集諸経礼懺儀 卷下・法顕伝・玄応一切経音義・南海寄帰内法伝 卷第一の思溪版に、欠筆字は皆無である。

以上、見出すことができた思溪版経文本文の欠筆字は、「敬」数例と、それよりも更に僅少な「弘・驚」がすべてであり、やはり、北宋初代太祖の祖父・父の諱に留まる。

版心記・千字文函号には、「殷貞」の欠筆例も加わるものの、右の実態から、思溪蔵の全体をつぶさに調査しても、親鸞が欠筆とした漢字すべての欠筆例を見出すことはできないであろう。

3. その他版本一切経の欠筆

親鸞に影響を与えた可能性のある宋版一切経として、東禅寺版・開元寺版における欠筆の状況も確認する。

① 東禅寺版

まず、思溪版で欠筆例を指摘できた『日蔵経』・『月蔵経』・『大般涅槃経』（南本）・『弁正論』・『大唐西域記』について、東禅寺版における欠筆例を探した。ただし、南本『大般涅槃経』は東禅寺版に未収録であり、『大唐西域記』巻第七・九・十一は調査対象とした醍醐寺蔵本では欠巻である。

その結果、左の箇所、「敬弘殷匡」の欠筆例が見られた。

『日蔵経』巻第九第八紙25行目「敬」（思溪版同巻第十紙4行目欠筆例と同じ）、『弁正論』巻一第十一紙32行目「殷」（思溪版は欠筆せず）・「弘」巻第三第八紙27行目（思溪版は欠筆せず）・「匡」巻第三第十一紙8行目（思

溪版は欠筆せず）・「匡」同21行目（思溪版は欠筆せず）・「匡」巻第四十三紙32・33行目、巻五第七紙29行目「殷」（思溪版は欠筆せず）、「大唐西域記」巻第五第四紙14行目「弘」（思溪版同巻第四紙29行目の欠筆例と同じ）。

右のうち、「殷匡」は思溪版経本文には見出せなかつた欠筆例である。東禪寺版は、右の範囲では、思溪版よりも欠筆例が多い。

本稿の筆者は、幸いにも、醍醐寺藏宋版一切経東禪寺版目録作成のための悉皆調査の機会を与えられている。その目録作成の目的から、全巻の巻首・巻末各二面（四面、および全函の音釈を撮影済みである。これは、全蔵の一割（二割程度に相当する。そこで、この範囲で欠筆例を探した。なお、この範囲に限っても、親鸞が欠筆とした「玄畜牽絃・敬競竟境鏡・弘・貞」のすべての漢字が使用されている。

右の範囲における欠筆例は、左が全例であつた。¹⁶⁾

- 玄一第四八九函『法苑珠林』巻第九十巻首、第五三〇函『大蔵経綱目指要録』巻第一・第二巻首、同巻第八巻首、第五六五函『大慧普覚禪師住径山能仁禪院語録』巻第二巻末、同巻第四巻首、第五六六函『大慧普覚禪師普説』巻第十六巻末、第五七〇函『首楞嚴経義海』巻第三十巻末、第五七一函『妙法蓮華経玄義』巻第一（五巻首・巻末・版心、第五七二函『妙法蓮華経玄義』巻第六・八巻首・巻末・版心、同巻第七巻首・巻末・版心、第五七三函『法華玄義釈籤』巻一（三巻首・巻末、第五七四B函『妙法蓮華経文句科』巻第二巻首、第五七五函『法華文句記』巻第二・四巻末、第六〇二函（雑第二十二函）『法華文句記』巻第十巻首・巻末、同『法華驗記釈籤』巻第九巻末、第六〇二函（雑第二十二函）『法華驗記科文』巻第五巻末。
- 敬一第七十一函『大明度経』巻第六巻末、第九十九函『大方等大集菩薩念仏三昧分経』巻第二巻末、第四八四函『法苑珠林』巻第三十九巻首、第五三〇函『大蔵経綱目指要録』巻第五巻首、第五三六函『菩薩名経

諸仏品』卷第一卷首、第五四四函『宮字函釈音』卷首、第五六一函『俊字函釈音』卷首、第五六九函『楞嚴經義海』卷第二十卷末。

竟一第五三〇函『大藏經綱目指要録』卷第六卷首、第五七六函『法華文句記』卷第六卷末、第五七八函『摩訶止觀科文』第五卷末。

境一第五七八函『摩訶止觀科文』第五卷末。

弘一第七十二函『金剛般若波羅蜜經』卷第五卷末、第二五〇函『撰大乘論』卷第一卷首、第四二二函『部異

執論』卷首、第四二九函『修行道地經』卷第三卷首、第五三〇函『大藏經綱目指要録』卷第七卷末、同卷

第八卷首、第五三四函『注大乘入楞伽經』卷第三卷首、第五七一函『妙法蓮華經玄義』卷第一卷首、第五

七二函『妙法蓮華經玄義』卷第十卷首、第五七九函『摩訶止觀輔行伝弘決』卷第一・二・五卷首・卷末、

同卷第三・六・七卷末、同第四卷首、第五八〇函『摩訶止觀輔行伝弘決』卷第十・十一・十三・十五卷

首・卷末、同卷第九卷首、同卷第十二卷末、第六〇二函(雜第二十二函)『摩訶止觀輔行伝弘決』卷第十

八卷首・卷末、同『法華驗記釈籤』卷第十卷首。

貞一第四八〇函『開元釈教録略出』卷第四内「大唐貞元新定目錄」卷首・卷末、第四八四函『法苑珠林』卷

第三十二卷末、第五三〇函『大藏經綱目指要録』卷第四卷首。

殷一第五三〇函『大藏經綱目指要録』卷第三卷首、第五八〇函『摩訶止觀輔行伝弘決』卷第十二卷末。

匡一第五二七函『建中靖國統灯録』卷第二卷首、第五四七函『一切如来真実撰大乘現証三昧大教王經』卷第

一卷首・卷末・版心、同卷第二・十卷首・卷末、匡字函釈音卷首・卷末。

恒一第四三四函『雜譬喻經』卷上卷首(崇寧元年(一一〇二)題記)、第五七〇函『首楞嚴經義海』卷第二

十八卷首、第五七四A函『妙法蓮華經文句』卷第二卷首。

徴―第五六八函『首楞嚴經義海』卷第四・八・九・十卷首（乾道八年（一一七二）「雕開新編」）、五七〇函『（同）』卷第二十四卷首、第五七八函『摩訶止觀科文』第三卷首・卷末。

洎―第五六九函『首楞嚴經義海』卷第十四卷首（乾道八年「雕開新編」）。

垣―第五六九函『首楞嚴經義海』卷第十七卷末（乾道八年「雕開新編」）、五七〇函『（同）』卷第二十七卷末。

以上、対象範囲が異なるため比較は困難であるものの、開寶藏・思溪藏と比較して欠筆例が多い^{〔17〕}。しかし、親鸞が欠筆とする「畜牽絃競鏡驚」を、宋版東禪寺版は欠筆としていない。

②開元寺版

東禪寺版に続く宋版一切経である開元寺版の欠筆例は、書陵部藏本内で調査した。

右で東禪寺版に欠筆例を見出せた箇所での、書陵部藏開元寺版における欠筆を確認した結果は、次の通りであった。ただし、書陵部藏本も当該箇所が東禪寺版の場合には、掲げない^{〔18〕}。

【書陵部藏開元寺版】（比較の便のため醍醐寺藏東禪寺版の函番で示す。）

〔欠筆〕

玄―第五六五函『大慧普覺禪師住徑山能仁禪院語錄』卷第二卷末、同卷第四卷首。

敬―第五四四函『當字函積音』卷首、第五六一函『俊字函積音』卷首。

匡―第五四七函『一切如来真实攝大乘現証三昧大教王經』卷第一卷首・版心・版心、同卷第二、十卷首・版

心・卷末、匡字函積音卷首・卷末。

弘―第四二九函『修行道地經』卷第三卷首。

匡一第五二七函 『建中靖国続灯録』 卷第二卷首。

恒一第五七〇函 『首楞嚴經義海』 卷第二十八卷首、第五七四A函 『妙法蓮華經文句』 卷第二卷首。

〔欠筆せず〕

玄一第四八九函 『法苑珠林』 卷第九十卷首。

敬一第九十九函 『大方等大集菩薩念佛三昧分經』 卷第二卷末、第四八四函 『法苑珠林』 卷第三十九卷首。

貞一第四八四函 『法苑珠林』 卷第三十二卷末。

弘一第四二二函 『部異執論』 卷首。

恒一第四三四函 『雜譬喻經』 卷上卷首。

右の如き実態で、開元寺版の欠筆は、東禪寺版と大きくは異ならないか、東禪寺版よりも少ないようである。

なお、中野雅之「宋版一切経の姿とかたち」(『唐物と宋版一切経』へ一九九八年、神奈川県立金沢文庫)所収)は、金沢文庫蔵宋版一切経における開元寺版二一二二帖の欠筆例として、『光明童子因縁経』卷第二の「敬」、『伝法正宗記』卷第七(隆興二年刊)の「玄・弘」、『桓字函音釈』の「桓」のみを挙げている。⁽¹⁹⁾

右のような、東禪寺版・開元寺版に欠筆例を多くは拾えない実態を踏まえて、これら「江南諸版の一切経」は、「欠画の制度が仏典に限り北宋の太平興国八年(九八三)に免除された以後のもので、原則として欠画しない」と言われていた。⁽²⁰⁾

③ 高麗版・金版・遼版

「開寶蔵の欠筆」の項で述べたとおり、親鸞の欠筆は高麗版・金版一切経の欠筆とは異なる。さらに、「建隆武堯」など高麗帝諱を欠く高麗統蔵経・高麗刊刻仏典・章疏類、および「億光阮明賢真基禧」を欠筆とする遼の版本(契

丹蔵)や房山石経(2)とも、親鸞の欠筆は異なる。

4. 日本における仏典の欠筆

では、親鸞と同様の欠筆を、同時代の日本版本・写本に見出せないものであろうか。

親鸞遺文の外に、鎌倉時代の日本における宋帝避諱欠筆例の報告として、次の例が管見に入った。(2)

『往生要集』建保四年(一二二六)版 「敬」

『往生要集』建長五年(一二五三)版 「敬」「弘」

『往生要集』黄紙版 「敬」

『般舟讚』貞永元年(一二三二)版 「匡」

『選擇本願念佛集』延応元年(一二三九)版とその覆刻版 「玄敬弘愍」

右の欠筆例は、いずれも浄土教版本である。これら浄土教版本における欠筆例も、親鸞の欠筆を覆うこととはできない。

また、親鸞自筆本以外の日本古写経では、意図的と判断される欠筆例の報告を、寡聞にして聞かない。開寶蔵の刊記を写した写経(石山寺蔵本・興聖寺蔵本・七寺蔵本・金剛寺蔵本など)においても、欠筆字を元の字に還している。(2)

底本の宋皇帝諱欠筆字を欠筆せずに書写しているのだから、隋唐系本文を伝えるとされる日本古写経をつぶさに調査したとしても、宋帝諱欠筆例は見出されないであろう。

北宋始祖「玄朗」から四代皇帝までを避諱する親鸞の欠筆は、言われてきた如く、院政鎌倉時代の日本版本・写本において特異である。

三、漢籍の欠筆

親鸞は、自作の文章においても欠筆を行なっている。また、「教・故」など、宋諱字でないものまで、時に欠筆している。したがって親鸞は、依拠本の欠筆字をそのまま真似たのではない。習得した「欠筆」という宋の文化事象を、自らの文章においても、経の引用に際しても、実践したものと考えられる。

その、親鸞の北宋皇帝諱欠筆は、欠筆が盛んな宋版漢籍の影響であろうかと推測されていた。⁽²⁵⁾ 親鸞は幼少時、藤原南家の儒士日野民部から、「儒典ノ本経ナムド」を習ったと伝えられる。親鸞が自著に漢籍をも引用していることは、この伝承を裏づけるものであろう。

しかし、宋版漢籍を親鸞が見たという記録は無く、先行研究も可能性を述べたに留まる。

近年、尾崎康を中心に、宋版漢籍の欠筆について多くの報告が重ねられている。また、複製本の刊行、インターネットでの画像公開が進み、欠筆字の確認も以前と比べて容易になった。その調査成果を、簡略な表（別表）にまとめる。⁽²⁷⁾

別表から知られるとおり、始祖の諱「玄」を含め、北宋四代仁宗趙禎の諱までを避ける親鸞と同様の欠筆は、宋版の漢籍に見られる。別表のとおり、「玄」から北宋四代皇帝までの諱を避けた版本は、北宋版ばかりでなく、南宋初期あるいは南宋中期の覆刻版に及ぶ。⁽²⁸⁾

南宋紹興二年（一一三二）に完成した思溪版一切経を引用した親鸞に影響を与えたのは、院政・鎌倉時代においてすでに希少であった北宋版漢籍ではなく、思溪版一切経と同時期の南宋紹興前半、あるいは南宋中期刊覆北宋版漢籍であった可能性が高い。

日本には、多種の漢籍が古くから将来され、平安・鎌倉時代を通じた儒仏一体の思想を反映して、寺社・文庫は外典・内典とともに具えてきた。⁽³¹⁾ 僧侶も、仏教・仏典に関する自己の著述中に漢籍を引用したことが、具体的に明らかにされてきている。唐の玄奘『一切経音義』は『爾雅』『広雅』『釈名』『説文』『字林』等を引用し、日本僧の編纂と考えられている原撰本系『類聚名義抄』も、中国古字書の外、『史記』『白氏文集』『老子経』『論語』等を引く。親鸞の師源空（法然）著『選擇本願念佛集』も、『孝経』『論語』を引用している。

『教行信証』にも漢籍を引用した親鸞は、幼少期に漢籍を学習しただけでなく、写経・版経とともに、北宋版あるいは覆北宋版の漢籍を晩年まで参照することができたであろう。

四、結論

本稿の目的は、親鸞が行なった欠筆の抛り所を特定することであった。調査の結果、宋版一切経とその覆刻本および日本の古写経などの仏典には、親鸞と同様の欠筆は見出せなかった。今後、より広範な調査を行なっても、結果は同様であろう。

親鸞の欠筆は、北宋版あるいは南宋初・中期覆北宋版の漢籍による学習から身につけたものと考えられる。

【別表】

連番	刊年	所蔵	書名	欠筆	皇代	典拠
1	北宋	お茶の水図書館	『新雕入象説文正字』	玄	0	◎D
2	1023～1032年間	書陵部	『孝経』	恒まで	3	S

29	紹興年間 (1131 ~ 62)	上海図書館	『三国志』	構まで	南1	O
28	紹興年間 (1131 ~ 62)	静嘉堂文庫	『(旧)唐書』	構まで	南1	E
27	紹興二十八年 (1158)	足利学校	『文選(六臣注)』	構まで	南1	B
26	紹興二十四年 (1154)	杏雨書屋	『備急総効方』	鏡まで	1	⊙ L
25	紹興十年 (1140) 頃	内閣文庫	『増公司馬温公全集』	殷まで	1	⊙ L
24	紹興十年 (1140) 頃	天理図書館	『通典』	構まで	南1	E
23	紹興十年 (1140)	杏雨書屋	『史記』	微まで	4	H
22	紹興九年 (1139)	杏雨書屋	『毛詩正義』	構まで	南1	E
21	紹興九年 (1139)	中国国家図書館	『漢官儀』	溝まで	南1	E
20	紹興九年 (1139)	中国国家図書館	『文粹』	構まで	南1	E
19	紹興七年 (1137)	静嘉堂文庫	『(新)唐書』	禎まで	4	E
18	紹興四年 (1134) か	北京大学図書館	『大唐六典』	署まで	5	N
17	北宋末南宋初期	中国国家図書館	『王摩詰文集』	貞まで	4	⊙
16	北宋末南宋初期	中国国家図書館	『李太白文集』	貞まで	4	⊙
15	北宋末南宋初期	中国国家図書館	『駱賓王文集』	貞まで	4	⊙
14	北宋末南宋初期	中国国家図書館	『漢書』	貞まで	4	H
13	北宋末南宋初期	中央研究院歴史言語研究所	『史記』	貞まで	4	H
12	北宋末	書陵部	『中説』	微まで	4	D
11	崇寧二年 (1103)	天理図書館	『明州阿育王山如来舍利宝塔伝并護塔靈輿菩薩伝』	微まで	4	⊙ A
10	北宋	書陵部	『通典』	微まで	4	D
9	北宋	北京大学図書館	『史記』	微まで	4	H
8	北宋	中国国家図書館	『史記』	微まで	4	S
7	北宋	杏雨書屋	『史記』	貞まで	4	H
6	北宋	静嘉堂文庫	『白氏六帖』	恒まで	3	W
5	北宋	尊経閣文庫	『重広会史』	微まで	4	⊙ D
4	景祐 (1034 ~ 1038) 年間	国会図書館	『姓解』	微まで	4	⊙ X
3	北宋	高山寺	『齊民要術』	恒まで	3	⊙

56	淳熙九年(1182)	国立歴史民族博物館	『致堂先生誠史管見』	慎まで	南2	M
55	淳熙三年(1176)	静嘉堂文庫	『史記(素隱)』	慎まで	南2	E
54	淳熙二年(1175)	静嘉堂文庫	『通鑑紀事本末』	慎まで	南2	K
53	乾道年間	内閣文庫	『東萊先生詩集』	完まで	9	◎
52	乾道年間	内閣文庫	『顛浜先生大全文集』	慎まで	南2	◎
51	乾道年間	内閣文庫	『東坡集』	慎まで	南2	◎
50	乾道九年(1173)	内閣文庫	『淮海集』	慎まで	南2	◎
49	乾道八年(1172)	足利学校	『尚書正義』	慎まで	南1	E
48	乾道七年(1171)	中国国家図書館	『史記』	構まで	南2	H
47	乾道五年(1169)	内閣文庫	『鉅宋廣韻』	構まで	南1	◎Y
46	南宋初期	内閣文庫	『予章先生集』	慎まで	南2	◎
45	南宋初期	上海図書館	『通鑑』	慎まで	南2	Q
44	南宋初期	静嘉堂文庫	『呉書』	慎まで	南2	◎G
43	南宋初期	成實堂文庫	『廬山記』	構まで	南1	A
42	南宋初期	天理図書館	『通典』	構まで	南1	D
41	南宋初期	中国国家図書館	『(旧)唐書』	構まで	南1	H
40	南宋初期	足利学校	『周易注疏』	構まで	南1	◎C
39	南宋初期	上海図書館	『後漢書』	構まで	南1	O
38	南宋初期	静嘉堂文庫	『李太白文集』	構まで	南1	V
37	南宋初期	静嘉堂文庫	『王右丞文集』	樹まで	5	◎U
36	南宋初期	中央図書館(台北)	『後漢書』	微まで	4	H
35	南宋初期	中央図書館(台北)	『五代史記』	貞まで	4	H
34	南宋初期	北京大学図書館	『史記』	懲まで	4	S
33	南宋初期	内閣文庫	『周易新講義』	貞まで	4	◎
32	紹興未頃	上海図書館	『史記』	丸まで	9	O
31	紹興年間(1131～32)	静嘉堂文庫	『外台秘要方』	完まで	9	E
30	紹興年間(1131～32)	内閣文庫	『廬山記』	微まで	4	◎M

83	南宋中期	北京大學圖書館	『昌黎先生文集』	敦まで	南3	◎
82	南宋中期	北京大學圖書館	『集古錄跋尾』	敦まで	南3	N
81	南宋中期	上海圖書館	『資治通鑑』	敦まで	南3	Q
80	南宋中期	書陵部	『太平實字記』	敦まで	南3	M
79	南宋中期	中国国家図書館	『漢書』	敦まで	南3	H
78	南宋中期	上海圖書館	『資治通鑑綱目』	敦まで	南3	Q
77	南宋中期	中国国家図書館	『皇甫持正文集』	敦まで	南3	◎
76	南宋中期	足利学校	『毛詩註疏』	敦まで	南3	◎
75	南宋中期	中国国家図書館	『姚抄監詩文集』	敦まで	南3	◎
74	南宋中期	中国国家図書館	『陸宣公文集』	慎まで	南2	◎
73	南宋中期	上海圖書館	『增人名儒集議資治通鑑詳節』	慎まで	南2	Q
72	南宋中期	中国国家図書館	『司空表聖文集』	貞まで	4	◎
71	南宋中期	中国国家図書館	『孟東野文集』	貞まで	4	◎
70	南宋中期	中国国家図書館	『孫可之文集』	貞まで	4	◎
69	南宋中期	中国国家図書館	『新刊元微之文集』	貞まで	4	◎
68	南宋中期	中国国家図書館	『張承古文集』	貞まで	4	◎
67	南宋中期	中国国家図書館	『新刊經進詳註昌黎先生文集』卷1-10	貞まで	4	◎
66	南宋中期	中国国家図書館	『新刊增広百家詳補註唐柳先生文』卷1-20	貞まで	4	◎
65	南宋中期	中国国家図書館	『新刊權載之文集』	貞まで	4	◎
64	南宋中期	中国国家図書館	『李長古文集』	貞まで	4	◎
63	南宋中期	中国国家図書館	『劉夢得文集』	貞まで	4	◎
62	寧宗時	国会図書館	『広韻』	積まで	4	◎A
61	慶元四年(1198)	上海圖書館	『後漢書』	敦まで	南3	O
60	紹興末慶元初	国立歴史民俗博物館	『史記』	敦まで	南3	◎P
59	紹興末頃	大倉文化財団	『韓集舉正』	敦まで	南3	R
58	紹興三年(1192)	足利学校	『礼記正義』	構まで	南1	E
57	淳熙年間	東洋文庫	『歴代地理指掌図』	慎まで	南2	M

84	南宋中期	静嘉堂文庫	『資治通鑑』	郭まで	南4	I
85	南宋中期	中国国家図書館	『三國志』	廓まで	南4	H
86	南宋中期	書陵部	『三國志』	廓まで	南4	H
87	南宋中期	静嘉堂文庫	『北史』	廓まで	南4	H
88	嘉定元年(1208)	中国国家図書館	『漢書』	慎まで	南2	H
89	嘉定元年(1208)	静嘉堂文庫	『後漢書』	敦まで	南3	H
90	嘉定五年(1212)	静嘉堂文庫	『歐公本末』	敦まで	南3	K
91	嘉定五年(1212)	静嘉堂文庫	『歷代故事』	敦まで	南3	M
92	嘉定十七年(1224)頃	中国国家図書館	『後漢書』	敦まで	南3	H
93	嘉定十七年(1224)	中国国家図書館	『漢書』	廓まで	南4	H
94	宝慶三年	天理図書館	『莊子音義』	慎まで	南2	◎F
95	宝慶(1229—1227)年間	内閣文庫	『史略』	敦まで	南3	◎M
96	宝慶(1225—1227)年間	内閣文庫	『子略』	廓まで	南4	◎M
97	紹定二年(1229)	台北中央図書館	『呉郡志』	廓まで	南4	S
98	嘉熙三年(1239)	書陵部	『新編四六必用方輿勝覽』	敦まで	南3	M
99	淳祐十年(1250)	静嘉堂文庫	『国朝諸臣奏議』	廓まで	南4	K
100	宝祐二年(1254)	成賞堂文庫	『致堂先生說史管見』	敦まで	南3	M
101	宝祐五年(1257)	北京大学図書館等	『通鑑紀事本末』	廓まで	南4	N
102	南宋後期	上海図書館	『資治通鑑綱目』	廓まで	南4	Q

【註】

- (1) 小川貫式「阪東本『教行信証』の成立過程」(慶華文化研究会編『教行信証撰述の研究』(一九五四年、百華苑)所収)、同「親鸞筆蹟の研究」(『現代語訳しんらん全集 第十巻 研究篇』(一九五八年、普通社)所収)、同「親鸞聖人にみる宋朝文化の種々相」(『龍谷大学論集』第365・366号、一九六〇年十二月)、田村悦子「親鸞の、特に坂東本『教行信証』の筆蹟について(上)(下)」(『美術研究』三一八・三二〇号、一九八二年一月・同六月)。

- (2) 井上見淳「親鸞聖人と『集諸経礼懺儀』」(『竜谷教学』四一、二〇〇六年三月)が推測し、能鳥覚「親鸞の用いた『往生礼讚』をめぐる

- て(『國際佛教學大學院大學學術フロンティア實行委員會「日本古写経善本叢刊」第四輯、二〇一〇年、所収)が明確にした。
- (3) 重見一行『教行信證の研究』(一九八一年、法蔵館) 261頁、佐々木勇「坂東本『教行信証』引用「日蔵経」「月蔵経」の依拠本について」(『佛敎史学研究』第57巻第1号、二〇一四年十一月)、参照。
- (4) 註(1) 諸論文、参照。本稿の筆者も確認した。
- (5) 「宋代避諱字表略」(静嘉堂文庫編纂『静嘉堂文庫宋元版図録 解題篇』へ一九九二年、汲古書院) 所収、米山寅太郎『図説中国印刷史』(二〇〇五年、汲古書院)、王建編著『史諱辭典』(二〇一一年、上海古籍出版社) によって作成した。
- (6) ただし、北宋・二代太宗・三代真宗の諱「義・恒」字は、使用していながら、親鸞は欠筆としない。この両字は、宋版本でも欠筆にされることが比較的少ない。
- (7) 大屋徳城「高麗統蔵雕造致補遺」(一九三八年、便利堂。『大屋徳城著作選集9』へ一九八八年、国書刊行会) 所収、同「高麗蔵の舊雕本と新雕本の交渉に関する実証的研究」(『大屋徳城著作選集6』所収、藤枝晃編著『高昌残影―出口常順蔵トルファン出土仏典断片図録』(一九七八年、法蔵館)、竺沙雅章『宋元佛敎文化史研究』(二〇〇〇年、汲古書院)。
- (8) 公刊された『開寶遺珍』(二〇一〇年十一月、文物出版社) 複製全十二巻中では、「敬竟愍弘」の欠筆例を指摘できる。李際寧「關於『開寶蔵』的避諱問題」(『國際學術會議發表論文集 初雕大蔵経斗東亞細亞の大蔵経』(二〇一二年、韓国學中央研究院))は、開寶蔵『大方等大集経』巻第四十三に「境」の欠筆が存するとするが、存在しない。なお、複製十二巻中に「殷」字は出現しない。
- (9) 竺沙雅章『宋元佛敎文化史研究』(二〇〇〇年、汲古書院) 三二七頁に依る。
- (10) 註(7) 大屋著書、上杉智英「七寺蔵一切経本『集諸経礼懺儀』巻下 解題」(『國際佛教學大學院大學學術フロンティア實行委員會「日本古写経善本叢刊」第四輯、二〇一〇年) 所収。
- (11) 野口鐵郎ほか『道敎事典』(一九九四年、平河出版社)、王彦坤『歴代避諱字彙典』(一九九七年、中州古籍出版社)、参照。
- (12) 尾崎康『正史宋元版の研究』(一九八九年、汲古書院)、二九頁。
- (13) 「思溪版蔵経に見える欠筆と刻工―六十華嚴を中心に―」(『福井文雅博士古稀記念論集 アジア文化の思想と儀礼』(二〇〇五年、春秋社) 所収)。
- (14) 元興寺文化財研究所編『宋版一切経』(二〇一一年、豊山長谷寺拾遺第四輯之一) 三七七頁。
- (15) 調査は、長滝寺蔵原本・増上寺蔵思溪版の広島大学蔵写真・『大乘起信論』(『日本古写経善本叢刊』第二輯、二〇〇七年)・『集諸経礼懺儀 巻下』(同上第四輯、二〇一〇年)・長澤和俊『法顯伝訳注 解説 北宋本・南宋本・高麗大蔵経本・石山寺本 四種影印とその比較研究』(一九九六年、雄山閣出版) および国立国会図書館デジタル化資料(『大唐西域記』・早稲田大学古典籍

総合データベース(『南海寄歸内法伝巻第一』)に依る。

- (16) 醍醐寺藏東禪寺版に、経文以外の詔勅・題記・捨銭刊記に、「敬・貞」の欠筆例が指摘されている(山本信吉『古典籍が語る』(一〇〇四年、八木書店)208・209頁)。

- (17) これらの欠筆例を、初出の函の順に並べると次のようになる。

第七十一函一敬、第七十二函一弘、第四三四函一恒、第四八〇函一貞、第四八九函一玄、第五二七函一匡、第五三〇函一竟・殷、第五六八函一徴、第五六九函一洄・垣、第五七八函一境。

このように、思溪版に指摘できた「敬・弘」以外は、蔵末に近い函まで欠筆例は出現しない。

大谷大学図書館蔵『福州東禪大藏経目録』(永享二年(一四三〇)刊)は、「自天字至于英字已上貞元録五千藏自法苑珠林至于華嚴合論福州新入」と刻する。英字函は、第四八〇函である。すなわち、欠筆例は、第四八一函以降の『法苑珠林』以下「福州新入」部分に集中している。

- (18) ここに掲げた例以外は、書陵部蔵本も東禪寺版であるか、または版種不明、あるいは書陵部蔵本欠帖である。

- (19) 『傳法正宗記』巻第七の書陵部蔵開元寺版本には、「敬・殷」にも欠筆例が見られる。そして、「敬」以外は、やはり、後に追加された書またはその音釈である。

- (20) 小川貫一「坂東本『教行信証』の成立過程」二二三頁。なお、東禪寺版・開元寺版の欠筆について、本稿の筆者は調査不足である。稿を改めて報告したい。

- (21) 大屋徳城『高麗統感離造放』(一九三七年、便利堂)、同『高麗統感離造放補遺』、参照。

- (22) 註(9)『竺沙著書』255・258・262頁。

- (23) 藤堂祐範『選擇集大観』一四八頁および同『浄土教版の研究』(一九三〇年、大東出版社。増訂版、一九七六年、山喜房仏書林)三二頁・四七頁、註(1)小川論文・田村論文、註(13)尾崎論文、同「古写古刊和書欠筆私考『往生要集』『選択集』『教行信証』

(『赤野井門徒と三宅組坊主衆』二〇一一年、善慶寺)、佐々木勇編『専修寺蔵「選擇本願念佛集」延書影印・翻刻と総索引』(二〇一一年、笠間書院)研究篇、参照。

- (24) 佐々木勇「北宋版一切経開寶蔵の欠筆とその伝播・受容について」(『広島大学大学院教育学研究科紀要』第62号 第二部、二〇一三年十二月)、参照。

- (25) 註(1)小川論文・田村論文。

- (26) 「伯父業吏部〈若狭守ノ範綱〉ノ養子トナリ、シハクノ俗典ヲナラヒ、聚螢ノミサホカツテ懈リナシ。七歳ノ春ヨリ倭歌ノ御稽

古アリ。歌集ナントモ多ヨミ覺タマフ。八歳ノトキ、南家ノ儒士日野民部ニシタカヒテ、儒典ノ本経ナントヲ読ワタリタマヘリ。(大谷大学楠丘文庫蔵写本『親鸞聖人御因縁(親鸞聖人正明傳)』卷一上)、「八歳ノ春ヨリ孝経ヲ讀ミハシメタマヒ、論語・孟子ヨリ次第第二五経六経ニ亘リ、九歳ノ二月中旬マテニ、孝子・文選ヲ終リタマフ。外書ノ御師八伯父三位、亦得業生日野民部忠経也、(十一歳)又時々粟田口ニ下リテハ、南家儒者日野民部太輪ヲ招テ著述ノ御稽古アリ。殊ニ白氏文集ヲ賞翫セラル。スヘテ外典ノ読クセモ外サマトカハリテ面白トコロアリ。(高田本親鸞聖人正統傳、卷第一。ともに『大系真宗史料、伝記編1 親鸞傳』に依る)。なお、江戸中期『親鸞聖人正統傳』は、良空の偽書とされる。しかし、『親鸞聖人正明傳』は、それまでの伝承をまとめて、室町末期に成立したものかという(山田雅教『親鸞聖人正明傳』の成立)(平松合三先生古稀記念会編著『日本の宗教と文化』へ一九八九年、同朋舎出版)所収)。

(27)

刊年が判明あるいは推定されている版本に限った。刊年推定の根拠が欠筆字のみに依る場合は、取り上げていない。表中、南宋の時代区分は、前期(一一二七—一一八九。その中で、一一六三年までを初期)・中期(一一九〇—一二三四)・後期(一二二五—一二七四)とする、注(12)尾崎著書序章附節三「版本学上の時代区分」に従う。

参考文献は、文献記号で記す。具体的には、以下の通りである。なお、本稿の筆者が調査したのものには、◎を記した。◎を記した資料の中には、先行研究の結果と異なるものがある。

A長澤規矩也『宋本書影』(一九三三年、日本書誌學會)。B同「明州本大臣注文選解説」(『文選』第一卷(一九七二年、汲古書院)。C長沢規矩也「南宋刊本周易注疏考」(『周易注疏』へ一九七三年、足利學校遺蹟圖書館後援會)所収)。D尾崎康「通典の諸版本について」(『斯道文庫論集』14、一九七七年十二月)。E同「北宋版 通典 別巻」(一九八一年、汲古書院)八頁、一七・一八頁。F小川環樹「解題」(『天理図書館善本叢書漢籍部1 古文尚書・莊子音義』へ一九八二年、八木書店)所収)。G米山寅太郎「解題」(『古典研究会叢書 漢籍部』6、へ一九八八年、汲古書院)所収)。H尾崎康「正史宋元版の研究」I同「宋元刊資治通鑑について」(『斯道文庫論集』23、一九八九年三月)。J竺沙雅章「解題」(『古典研究会叢書 漢籍部』16、へ一九九一年、汲古書院)所収)。K尾崎康「日本現在宋元版解題史部(上)」(『斯道文庫論集』27、一九九三年三月)。L李裕民著・佐竹靖彦訳「増広司馬温公全集」影印序(一九九三年、汲古書院刊影印本所収)。M尾崎康「日本現在宋元版解題史部(下)」(『斯道文庫論集』28、一九九三年十二月)。N同「北京大學図書館蔵宋元版解題 史部」(『斯道文庫論集』30、一九九六年一月)。O同「上海図書館蔵宋元版解題・史部(一)」(『斯道文庫論集』31、一九九七年一月)。P同「解題」(『古典研究会叢書 漢籍部』28、へ一九九八年、汲古書院)所収)。Q同「上海図書館蔵宋元版解題・史部(二)」(『斯道文庫論集』32、一九九八年二月)。R佐藤保「解題」(『古典

- 研究会叢書 漢籍之部 39」(二〇〇二年、汲古書院)所収)。S同「宋代における刊刻の展開」(『帝京史学』19、二〇〇四年二月)。T「備急総効方 解説」(『杏雨書屋蔵 宋版備急総効方』二〇〇五年、杏雨書屋)所収)。U米山寅太郎(高橋智注)「解題」(『古典研究会叢書 漢籍之部』32、二〇〇五年、汲古書院)所収)。V米山寅太郎「解題」(『古典研究会叢書 漢籍之部』37、二〇〇六年、汲古書院)所収)。W山口謠司「書誌」(『古典研究会叢書 漢籍之部』42、二〇一二年、汲古書院)所収)。X国会図書館ホームページ。Y内閣文庫ホームページ。
- (28) 尾崎康「宋代における刊刻の展開」は、南宋初期における北宋版漢籍覆刻に、一切経東禪寺版・開元寺版・思溪版の刻工が携わったと推定している。
- (29) 大庭脩『古代中世における日中関係史の研究』(一九九六年、同朋舎出版) 附篇、参照。
- (30) 右注大庭著書、『浄土教と平安写経・七寺の世界』(一九九七年、華頂短期大学編)、落合俊典「東アジア仏教写本研究拠点の形成」の概要「(い)とくら」第6号、二〇一〇年十二月、参照。
- (31) 右注諸論および山本信吉『古典籍が語る』(二〇〇四年、八木書店) 230頁同『貴重典籍・聖教の研究』(二〇一三年、吉川弘文館) 序章、参照。
- (32) 河野貴美子「仏教『日本霊異記』にみる漢籍の受容と消化」(『和漢比較文学』29、二〇〇二年八月)、同「善珠撰述仏典注釈書における漢籍の引用」『成唯識論述記序釈』をめぐると「考察」(『中古文学』71、二〇〇三年五月)、同「善珠撰述仏典注釈書における老荘関係書の引用」(『アジア遊学』73、二〇〇五年三月)、同「平安末期における善珠撰述仏典注釈書の継承」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要 第3分冊』51、二〇〇六年二月)等、参照。
- 〔付記〕 本稿の調査のために、醍醐寺・石山寺・岐阜県長瀧寺・増上寺・宮内庁書陵部および国際仏教学大学院大学日本古写経研究所御当局には格別のご高配を頂いた。醍醐寺蔵宋版一切経は、小林芳規代表の日本学術振興会科学研究費による原本調査に基づく。また、勤務校所属講座の佐藤大志氏から、中国の避諱について教示を得た。なお、本稿は、二〇一三年二月二日の国際仏教学大学院大学における研究発表後半部分を基にしている。席上、落合俊典先生はじめ、参会の皆様によくをお教えたいただいた。ここに明記して、原本所蔵者および関係各位に深謝申しあげる。